自我同一性形成過程に関する一考察
――青年僧侶について――

佐藤光政

一、問題の所在

現在、青年僧侶と一般によばれる者達の多くは、父母のある寺（家族）で教育され、その中で自らの宗教観・宗教的態度を形成していき、やがて、自らも家庭を持ち、一僧侶、一社会人、父親として、次の世代の教育、錬成を行う立場となる。

本研究においては、伝統的ともいえる社会に育つ青年が、どのように自己の役割を受容して、自己を確立し、自らの宗教観、宗教的態度を形成していくのかを考えてみたい。

環境的要因と宗教観、宗教的態度の形成の関連性を探るということは、多分に臨床的判断を含むものであり、統計的手法に馴みにくいと考えられ、そのため本研究においては、事例的研究（個性記述的研究）を心がけることにする。

また、本研究を進める際の手がかりとしては、E・H・エリクソンの同一性概念・理論（Idontity Treory）を基礎に、その実証研究方法たる、J・E・マーシャの同一性地位面接（Idontity Status interview）を採用する。

この方法では、被験者の示す微妙なニュアンス、全体像に触れうる利点がある。

しかしながら、これまでこの方法を用いた諸研究は、被験者として一般の大学生、大学院生という集団を対象にしていたことから、今回の調査・研究にあたっては、内容的に若干の捕捉・修正を加えて、より有効性のあるものとしなければならない。

また、本研究を進めていく過程で浮び上った現代において、寺院や青年僧侶が、共通的にかかえると思われる問題についても、本研究のテーマと関連の深いものについては言及したい。

尚、宗教という語についてであるが、この語は、本来、きわめて多義的な定義・意味を含むものだといわれている。本研究で指す宗教観とは、信仰を持つことに対する自分の感想（意味づけや疑問）、自分の生涯において信仰を持つ意味等であり、宗教的態度については、信仰に裏づけられた言動・生活信条等の意と理解して戴きたい。

一、問題の背景

○同一性理論（Identity theory）

E. H. エリクソンは、自我心理学の流れの中で、心理・社会的な理論的基盤の明確化をめざした。

彼は人間を本質的に、社会的・目的志向性を持つ存在ととらえ、人格形成・適応に対して、積極的役割を果たす自我の自律的な発達を捉えようとしたのである。

彼の提唱する同一性理論によれば、人格の形成は、人が生物学的基礎の上に、社会歴史的現実をふまえつつ発達上の経験をその自我の統合力・活力により体制化される過程であるとする。

彼の理論の特徴としては、まず、人生の周期ともいうべき、心理社会的な発達の諸段階（図①②）を規定し、人

	1	2	3	4	5	6	7	8
Ⅷ　円熟期								自我の統合 対 絶望
Ⅶ　成年期							生殖性 対 停滞	
Ⅵ　若い成年期						親密さ 対 孤独		
Ⅴ　思春期と青年期					同一性 対 役割混乱			
Ⅳ　潜在期				勤勉 対 劣等感				
Ⅲ　移動性器期			自発性 対 罪悪感					
Ⅱ　筋肉肛門期		自律 対 恥と疑惑						
Ⅰ　口唇感覚期	基本的信頼 対 不信							

図1　八つのステージ（『幼児期と社会』より）

	A 心理・社会的危機	B 重要な対人関係の範囲	C 関係の深い社会秩序要素	D 心理・社会的様式	E 心理・性的段階
Ⅰ	信頼対不信	母親的人物	宇宙的秩序	得　る お返しに与える	口愛―呼吸 感覚―運動段階 （合体的様式）
Ⅱ	自律的対恥　疑惑	親的な人物 （複　数）	法律と秩序	保持する 手放す	肛門―尿道段階 筋肉（貯留―排泄的様式）
Ⅲ	積極性対罪悪感	基本的家族	理想的な標準型	思い通りにする （＝追いかける） まねをする（＝遊ぶ）	幼児―性格・歩行段階 （侵入―抱括的様式）
Ⅳ	生産性対劣等感	“近　隣” 学　校	テクノロジィ的要素	ものをつくる （＝完成する） ものを一緒につくる	“潜状期”
Ⅴ	同一性対同一性拡散	仲間集団と外集団 指導性のモデル	イデオロギー的な展望	自分自身である（または自分自身でないこと）・自分自身であることの共有	思春期
Ⅵ	親密と連帯対孤立	友情・生・競争・協力の相手	協同と競争のパターン	他者の中で自分を失い・発見する	性器性
Ⅶ	生殖性対自己吸収	分業と共同の家庭	教育と伝統の流れ	世話をする	
Ⅷ	完全性対絶望	“人　類” “わが種族”	知　恵	過去各種によって存在する・存在しなくなることに直面する	

図2　展望図（『自我同一性』より）

格は段階的に形成されていくという漸成論の立場に立つことがあげられる。

また、その段階の中でも、エリクソンは、自我同一性（アイデンティティ）の問題が、問い直しを必要とされる時期は青年期であるとする。そして自我と社会の相互関係において、心理・社会的なものがプラスに向った産物として、同一性の確立を、マイナスの方向としての産物を、同一性の混乱・拡散として概念化した。

そして、この青年期において、幼児期以来の育ちから一時的に離れ、社会的現実の許す範囲で、様々な可能性を演じながら、社会的現実の中で、自分らしい自分を再選択し、自我同一性の永続的パターンへと統合していく期間[1]として、モラトリアム期という潜在的な時期に積極的価値を見い出したのである。

モラトリアム期は、幼年期（Childhood）と成人期（adulthood）、そして個（individual）と社会（Society）という両極に位置するものを連続線上に、同一性概念という意味から結びつけるものである。

そして、最終的選択は、青年期の終わりに下さねばならない。何かを選択することは、それ以外のものを断念・喪失することでもある。

次に、人生の各々の周期においては、解決せねばならない固有の発達課題が図①の如くあると考えている。その解決は、前段階において準備され、その後の段階においてさらに進んだ解決がなされる。各段階は、肯定的なものと否定的なものの両極端が対峙する形で示されている。ここでは、肯定的なもののみが有意義なわけではなく、両者の均衡こそが重要な意味を持つのである。

そして、彼は個人の発達過程を、孤立的にとらえずに、その相互性を重視する。すなわち、幼児が発達課題を解決していくのは、母親の世話によるものであるが、一方、母親は子供の世話をすることで、自分も成長していくという「与えて得る」という、いわば弁証法的な過程としてとらえている。

更に、エリクソンは、社会、歴史、文化の価値観が、親との相互性を通して、個人の発達や社会の変動とともに、積極的に伝達継承が行われる過程を明らかにしている。(gererativity)

○同一性地位面接（Identity Status Inteview）

同一性概念は、前述のように多義的、包括的である。ある時は、他者と異なり、呑み込まれることのない人間の個別性、独自性の意識ないしは自覚をさすこともあれば、外的変化と内的葛藤に直面しながらも一貫した自分であり続けようとする主体自我の統合過程を意味することもある。さらに自らの存在をより確かなものにするために歴史―社会的価値体系に積極的に根をおろし、その根を共有する仲間との連帯や帰属意識に強調点がおかれることもある。

それ故その実証研究においては操作的定義が用いられた。どのような操作的定義を設けるかにより、そこで強調される同一性の側面に微妙な違いが生じているといえる。研究方法としては、質問紙法・投影法・面接法等がある。(2)

マーシャJ・E・は半構造化された面接法により、自我同一性の達成度の測定法を考案した。(3) これは、マーシャ以前の質問紙等の研究の多くが、被験者を同一性達成、同一性拡散という二極に分類するという形式のものであったことから、その人がどのような過程を経て、どの程度の同一性が達成されたのかを把握できる基準を考える必要があったのである。

マーシャは、その心理社会的基準を考えた。

そして彼は、主観的な感覚である準拠枠としての集団（国・派・仲間）への内面的連帯感・帰属意識、いわば集団同一性（group identity）の意識は、青年にとって、自らの同一性を確立するために重要なものであると考えた。

個人の心理、社会的同一性の形成は、内的葛藤を続けながら、個人の核心に、そのような意識が定位され、根づいていく過程であるともいえるからである。

青年は、集団の共有する価値体系すなわちイデオロギー的世界像を自分の中に受け入れて、その内面的再構成・再統合が行われるのである。ここでいうイデオロギーとは、青年に生きる方向性を与え、混沌とした内面を再統合し、精神的な帰属点を確保するような価値体系のことである。

そして、マーシャは、その心理社会的基準として、エリクソンの青年後期の記述から、次の二つの次元を取り上げたのである。

一つは、青年が役割の試みの後、自分にとって意義あるものを積極的に選択し、意味決定を行う一時である所の「危機」(Crisis) を経験したかどうかということ。

二つには、この意志決定後に続いておこる職業やイデオロギーなどの人生の重要な領域に対して積極的関与・傾倒 (Commitment) をしているかどうかということ。[4] そして、同一性達成 (Identity Achievement) モラトリアム (Moratorium) 早期完了 (Foreclosure) 同一性拡散 (Identity Diffusion) という四つの型を設定したのである。(図③) マーシャは、職業・宗教・政治の三領域からなる半構造化された面接 (15分〜30分) を実施し、それを録音し、そのテープを評定者が二度づつ聞いた後、各領域と総合評価の二通りで評定した。

日本では、無藤清子 (1975) が、自我同一性地位に関する研究を行った。その際、彼女はマーシャの方法を多少修正したが、中でも、宗教の領域の代わりに価値観の領域を設定したことには注意しなければならない。これについて、無藤は、「日本においてはある特定の宗教を信仰している親つまり、青年にとっての強力な同一化の対象、または、それに対して青年が、自分の立場をはっきりさせなければならないような確固としたものが存在するのはま

表1　Marcia の自我同一性地位

自我同一性地位	危機	傾倒	概　　略
同一性達成 (Identity Achievement)	経験した	している	幼児期からの在り方について確信がなくなりいくつかの可能性について本気で考えた末、自分自身の解決に達して、それに基づいて行動している。
モラトリアム (Moratorium)	その最中	しようとしている	いくつかの選択肢について迷っているところで、その不確かさを克服しようと一生懸命努力している。
早期完了 (Foreclosure)	経験していない	している	自分の目標と親の目標の間に不協和があり、どんな体験も、幼児期以来の信念を補強するだけになっている。硬さ（融通のきかなさ）が特徴的。
同一性拡散 (Identity Daiffusion)	経験していない	していない	危機前（Pre-crisis）：今までに本当に何者かであった経験がないので、何者かである自分を想像すること不可能。
	経験した	していない	危機後（Post-crisis）：全てのことが可能だし可能なままにしておかれなければならない。

図3　4つの同一性地位―マーシャ J・E

れであろう」[5]と述べている。彼女は職業、価値観、政治の三領域の質問を設定した。

一、親子関係と青年の精神力動

○男子青年の親同一化の過程

※青年期前

男子青年において、同性の親への同一化をはじめるのは、一般には三、四歳ごろからと考えられる。自分の性別の理解ができるにつれて、母親との人間関係に加えて、この時期における父親への同一化は、〝とり入れごっこ〟であり、父親の個々の振まいをバラバラにまねているにすぎない。

その後、エディプス的状況[6]を気にとめるようになり、同性として、戦闘的に近づく。（五、六歳）

そして、歯が立たない体験の後、非力な自分を否認して親のようになろうと切望する。子供は、親との葛藤から、何が受け入れられ何が受け入れられないか、自分の欲動の表わし方を学び（自己統御）、それを基礎として自らの心の中に、内的システムを発展させる。

その組織をフロイトは〝超自我〟と呼ぶ。これは、父母の戒めや、処罰の機能が、内在化し、発達して、現在の社会集団からの要請に順応した形で、自分を規制していくのである。

これらの過程は、現実の親を離れた後、その人の一生を通じて行動の選択、問題解決の様式に、重要な影響を与えることになる。

児童期に入ると、親は技能とか知識についての学習を通して、子供の自我理想（導くもの）として認識されるようになる。

※青年期

さて、青年期において、青年は「自分は、人生のどの時点においても、過去の自己、現在の自己、未来の自己は、自分にしかない独自の生き方をもって連続している」という自我同一性の意識の確立を行う。

過去より未来に目標をおき、そこに自分の永続的価値を見い出そうとする時、最も問題となるのは、現在の自分が、親への同一化によって成立ってきたことへの検討である。

この時、積極的同一化によって培われてきたものである場合は、青年期において、あるべき自己を描く場合に、これまでの自分を肯定し、それを基礎としつつ、親という枠にとらわれない自分の理想を描きながら、現実の親から離脱しようとする心理過程が生じていく。そして、自分で作りあげようとする未来にわたる自我同一性の素材として、親以外の人達、あるいは読者等を通して得た感銘をもとに、これからの自分を見い出していく。

しかし、青年期までの親子関係において、親が子供に対して、全てのことを押しつけることによって、規定した生活をすごしている場合には、絶対的ともいえる存在である親に反抗することは、非常に危険なことであるので、好ましいとは思わぬままに、盲従的な同一化をはかるのである。

このような自我形成の過程を歩んできた場合には、青年期になって、他の人々と接する中で、自分の考え方や生き方が、借り物にすぎないことに気づくことになる。まさに未来に、目標をおくべき基盤としての過去から現在に至る自分が見当らないところから、逆に自我同一性が、こわれ、混乱した状態になるのである。

しかし、たとえ先のように積極的同一化の過程をたどった場合でも、青年期に入って、自分に目を向けた時に、成長させてもらっている自分、与えられたものによってできている自分に気づき落胆することがある。それは、虚脱感を生み、青年期のいわゆる心理的危機も招くことになる。

青年前期において、一時的にせよ、親に対しておこす反抗は、周囲の世界にあるモデルからものを吸収して作っ

てきた自分、身近な親へ同一化してできた自分を、自分だけの同一性確立へと移行させる転換現象でもあるといえる。

この場合、自分に影響を与えた親を否定しつづけるか、それとも影響を受けたことを自分の良さとみなしていくかは、親子間に相互的な信頼、尊敬があるかどうかにかかっているといえる。

青年期に達した子供にとっては、親は、児童期までのように、物心両面で、自分を保証してくれる他者というものではなく、人生の先輩という水準で親を評価し、尊敬に足る人であるかを吟味していこうとする。このような角度からの視点が子供に生じた時、成長しつづけようとしない親の姿は、子供にとっての自我理想とは、かけ離れたものとなり、価値的に低落するのである。

○仮説

青年僧侶は身近にある者（父である可能性が高い）を幼年期以降、青年期に至るまで同一化の対象として育つ。青年期に至って自らの課題が、実存にかかわるものを含むことに気づき、自分なりの意味づけやとらえ直しが行われる。ある者は、肯定的姿勢からそれを行い、ある者は、否定的姿勢から行う。

その際には、これまでの自分の吟味のみでなく、同一化の対象であった者の吟味も行う。その後、それがどのような内容（否定的・肯定的）を持つものであれ、その者独自の宗教的態度・宗教観が形成されていく。

このような過程にあって、青年と親との間の精神力動は、大きな影響を及ぼし、それにより決定的な方向づけすら行われうる。

一、基本的立場と質問領域

本研究においては、被面接者の類型化のみにこだわらず、むしろ、〝地位〟という意味を「時間的推移の中で被面接者が示す一つの状態像」ととらえて、発達的プロセスとして考えてみたい。すなわち、個人が漠然と、どの地位にあるかを大きな問題とせずに、どんな状況下で、どの程度、どの地位を示すかが、より大切な問題とするのである。

そのため、質問領域に環境の領域として〝家族〟の領域（親子関係）を加えた。内容的には、現在大正大学カウンセリング研究所で進めている家族イメージの調査内容（村瀬、伊藤作成）を基本に、必要と思われる事項を修正付加した。

宗教の領域については、マーシャのものを基本に、信仰集団に関する質問を加えた。

また、青年僧侶といわれる青年達と学校教育等においても隔絶のない環境にあることから、彼らが、無藤の指摘した、日本の青年の傾向と全く無関係であるとは考えられない。そのため、被面接者である青年僧侶の宗教観・宗教的態度が、職業的・学問的意味からでもない形で、その人の核心に根づいているか否かを確認する必要があり、その重複を知りつつ、価値観の領域も加えることとした。

政治については、無藤も「日本においては極端ではなく、真中だというように、ある程度、漠然としていても、そのままですむような社会的背景がある」と述べていることや本研究の問題とすることより、いささか離れることもあるので、今回は除いた。

その結果、本研究質問領域は、職業、宗教、価値観、家族の四領域となった。[6]

○手続き（被面接者、評定方法等）について

条件については、学歴は大学在籍中もしくは卒業していること。寺院において育ち、僧籍を有する者で年齢は二

十歳から三十歳位までとした。数は30名程。主に宗教観と家庭環境について面接を行い、プライバシーは厳守するということで依頼した。

面接はテープに録音した。所要時間は一時間弱であった。録音テープを三人の評定者が聴き、特徴的なものを逐語録にし、それをサンプル的に評定する。その後、それを基本に他のケースを評定する。基準は三つ（職業、価値観、宗教）の領域においての危機の存在と傾倒の程度[7]である。家族の領域については行わない。[8]

この評定については、領域別の同一性地位を評定し、その後、全体的同一性地位を評定する。

○修正した点（面接実施途中）

六名程を面接した時点で、被面接者（学部四年生4人、三年生一人、修士課程終了者一人）六名中五名が、早期完了型（以下F型と略す）とみなされ、一名が早期完了型から同一性達成型（以下A型と略す）への移行型とみなされた。

特に職業の領域については、全てがF型とみなされた。

これらのことから、マーシャの四つのスティタス以外の下位類型を設ける必要性を感じ仮説的に次の四つの型を設定した。

Ⅰ　生活環境の中で現われたもの（人、事、物）を無理なく取り入れて、自らの核心の一部としている。（Ⅰ型と呼ぶ）

Ⅱ　自らが育つ伝統的ともいえる社会の特異性に外部の刺激等により気づいて、内的葛藤が起こり、拒否的に受けとめた時期がある。

ⓐ　自らが、苦悩のうちに、独力あるいは様々なきっかけ（人、事件、書物との出会い等）で、自分の役割を積

極的、肯定的にとらえ直した。（Ⅱ―a型と呼ぶ）

ⓑ 葛藤がおさまらず、いまだに、自分の役割について、苦悩している（Ⅱ―b型と呼ぶ）

ⓒ 批判、拒否の意味を深く自らに問うことの苦しさ、難しさから、ひとまず離れて現実的状況に順応している（Ⅱ―c型と呼ぶ）

先の四つのステイタスと共に、この仮説についても一応のカタゴライズを行う。[9]

面接方法も〝絞切り型〟になりがちの中立的面接（マーシャの言う）にこだわらず、質問項目をふまえながらも、時には面接者が素直な自己開示を行うといった、面接者と被面接者間に深い信頼のある相互交流を心がける。

宗教の領域については、より明確な考え方を示す被面接者の選択が必要であり、年齢的な幅を多少拡げても、そうした条件にかなう人を選択する。それがなされなければ、環境的要因と宗教的態度の関連性についての考察が困難であると感じた。

一、結果と考察

○マーシャの同一性地位について

前半、後半の被面接者の総数は20名、内訳は38歳一人、34歳一人、33歳三人、31歳一人、30歳一人、27歳二人、25歳三人、23歳一人、22歳五人、21歳一人、20歳一人であった。（宗派は、本派、豊山派、天台宗、浄土宗）

同一性地位の評定結果としては、早期完了（F）型から、同一性達成（A）への移行型7名、F型のみ8名、モラトリアム（M）型からA型への移行型2名、M型のみ2名、同一拡散・混乱型0名であった。

本稿では、頁数に限りがあることから、一々の事例に対してのコメントは次の機会に譲り、本研究における、

マーシャの四つの地位、私の四つの仮説の妥当性、その意味についてのみここでは述べたい。

※質問領域について

職業、宗教、価値観は本来であれば、明確にわけることのできる領域のはずであるが、こと僧侶というものの特異性ゆえに、それが密接に関連しており、被面接者達の解答のうちにも、少なからぬとまどいを感じた。

僧侶というものの持つ二面的な性格、すなわち職業的要素（現実的イメージ）と宗教的要素（超越的イメージ）をどのように受容し、自分の内に統合すべきかという問題を迫られ、それ故に、青年僧侶の内には、大きな内面的葛藤が生まれるのであろう。

①職業の領域について

危機＝多くの者が、兄弟の数、両親の期待、使命感等から、危機（大きな煩悶を伴う選択の時期）を経ずに、〝迷い〟程度の経験の後に僧侶となることを決めている。

これらの人々の何名かは、大学入学後の友人との語らいの中や加行等の修行の際に、とらえ直しを行い、僧侶というものに自分なりの意味づけをおこなっている。

傾倒＝他の職業は考えていないということを一つの判断の基準とした。

この領域について、F→A型、A型と判断する基準は、傾倒との関連から、被面接者の答えのうちに、宗教家として一つの方向づけをもって、具体的に取り組んでいることが明確に把握できる場合とした。

その意味では、学生の大多数は、F型にとどまった。

②価値観の領域について

自分の主義信条や仏教思想等を自分の言葉で、表現できる者をA型とした。

③宗教の領域について

危機＝宗教の選択は、青年僧侶にとって自由ではない。彼らは、ある特定の宗教を信仰しなければならない使命を負っている。それが信仰といえるのかどうかという煩悶にまで至っている者は意外に少ない。

ここでは、危機を〝選択の時期〟というよりも、〝とらえ直しの時期〟と拡大解釈をし、評定を行った。

傾倒＝信仰する宗教やそれを信仰することへの意味づけを自分なりに表現できているかどうか。

この領域においてA型とみなす基準は、たとえ具体的取組みがなく、観念的抽象的な形でしかない場合でも、自分の考え方を明確に主張できる時は、そう評定した。

※四つの地位を示した者の印象

同一性達成型＝安定した語り口、全般的に見て、何かを「やりとげる」ことができるように感じる。積極的な姿勢を示す人、静かな雰囲気のうちにも、自信をみなぎらせている人等が存在した。（A型）

早期完了型＝マーシャのいうある種の硬さ（両親の価値観が通用しない状況下におかれたならば、自我が大きなストレスにさらされる可能性）を感じさせる人は少なく、もっと柔軟な印象を受けた。

すなわち日本青年の一般的傾向でもある北村や無藤[10]の指摘のごとく、両親をはじめとする環境的制約に拘束されているよりは、そういう価値や生き方に同調しているという、いわば前者を〝硬いF〟と呼べば、〝柔軟なF〟と呼べるものである。

これは、一面に〝安易さ〟〝未熟さ〟でもあり、今後も大過なく生きていくだろうという所からは〝器用さ〟にもつながる。

モラトリアム型＝この型に属する者は本研究の場合、男子の兄弟があり、且つ両親との間に相互の信頼関係が確

立している者に限られた。

○四つの型について

※結果

Ⅰ型12名、Ⅰ＋Ⅱa型5名、Ⅱb型1名、Ⅰ＋Ⅱa→Ⅱc型1名、Ⅰ＋Ⅱc型1名であった。

※四つの型の印象について

Ⅰ型＝明るく、おだやかな印象を与える。中には、危機的状況を経験していないためか、内面的統合性が小さな形で安定してしまっている人がいた。

Ⅰ型＋という複合型＝青年は意識的、無意識的に周囲のものを自らのうちに、取捨選択しつつ取り入れていく。これを全面拒否することは、主体の存在をも危くするものであり、時として病理的なものへ進む危険性すら帯びる。むしろ、人は混乱と動揺の時期を自分の内にあるものを受容し、それを基盤として乗りこえていくことが望ましいといえる。

Ⅱa型＝この型の人間は、比較的明確な発言、考え方をする。自信を外面的に前に出す人、内に秘める人、各々の傾向はあるが、共通しているのは、存在感を感じさせる人が多い。しかし、反面、独善的傾向も伺える人もいた。

Ⅱb型＝物事についての正邪の弁別に厳格である。きわめて強い自己拡張欲、豊かな感受性を感じさせる。混乱と動揺が人一倍強くいろいろな意味で障害に直面する確率が高い。

Ⅱc型＝この型については、当初、冷笑的態度をもって物事にあたるという傾向を予想していたが、そうした者はいなかった。（当方の被面接者に課した条件の影響か？）

（Ⅰ＋Ⅱａ→Ⅱｃ）という複合型があり、自分が将来、寺院において中心的役割を果たす時に備えて、自ら良しとする方向へ知識、技術の習得、研鑽に、その「控え」の時間をあてているといった人がいた。

時には、現状に対して〝割り切った〟考え方をして、一面、自らの内面を深く掘り下げることはしない傾向も伺えた。

○親子間の精神力動と宗教的態度の形成との関連について

良好な親子関係（特に父子関係）と宗教的情操の発達とはある程度の相関関係にある。

すなわち、父であり、僧侶である者への、子たる青年僧侶の積極的同一化は、宗教観、宗教的態度の形成に関して、肯定的、意欲的な志向を持つ基盤となる。

そして、青年期に至って、再び、同一化の対象たる父について見直しが行われる。その際に、人生の先輩、僧侶としての姿を再度肯定、確認ができた時、抵抗なくある宗教的態度（深浅は問わない）を形成する。

しかし、逆にその姿に失望を感じた時は混乱、動揺のうちに、他のモデルを探して、親より離脱する形で宗教的態度を形成する。時として、そういった領域に関して、全面的に否定する場合もあろう。

その混乱が、現実を生きる挫折のような現実対拠的なものであるが、あるいは自らの実存に触れるような深いものであるかは、それまでの親子間の相互の信頼関係と、青年の感受性、内省力に左右されると考える。

僧侶としての自我理想を、最も身近な存在たる父に見い出せない場合、それに代る人（祖父、おじ、恩師、先輩等）あるいは歴史上の高僧（釈尊、宗祖等）に見い出す。同一化の対象を比較的広い範囲に求めることが可能であり、むしろそのような過程を歓迎する傾向があるのは、他の社会に比して、特筆すべきことであると思う。

さて、それでは、青年期のまでの間に、両親への不信感、反発が強く、両親との間に精神的な交流体験が希薄な場合は、確固とした宗教的態度等の形成は困難か。それは否である。幾多の宗教的な偉人が、その成長過程を不遇のうちに送ってきたことも事実なのである。

この面接においても、31歳のF→A型、Ⅰ＋Ⅱa型とみなされたある被験者は、「私の妻は、素直で肯定的な両親像を持っており数えられることも多いが、世の中には、複雑な思いを抱く人がいることも事実で、その人達については、自分の方が、より深く理解できると思う。」と述べている。否定的な境遇が、かえってその者の人格を深め、それが、確固とした宗教観、宗教的態度の形成へとつながる場合もある。

しかし、これは、きわめてその自我が強い者に限られると思われる。多くの者にとっては、そのような否定的要因は、何らかの形で、人格統合の障害となり、青年期に至って、個人の安定を脅すものとなる。

また宗教的態度、宗教観の形成が人格統合に寄与するのか、人格統合の所産として宗教的態度、宗教観の形成があるのかという問題については、これは本来的には螺線状に展開していくと考えるが、本研究の青年僧侶らの場合、青年期までは後者の場合が多いように観察された。

まさに、人間の実存の問題である宗教等の領域においても家族間の精神力動は、大きな影響を及ぼしており、現代においてそれらの要因を全く除いては、寺院、僧侶というものを考えられない状況になっているのではないか。

寺院においての宗教的な役割という面においては、比較的影の薄い母親が、子たる青年僧侶にとって宗教的情操の発達という面では、非常に重要な役割をになっているといえる。

これは、20名の被面接者の全員について、程度の差はあれ、母親との関係については肯定的な姿勢が観察された。

S．M氏（I型、F→A型）27歳は「男性は誰でもマザコン的な部分を持っているかもしれませんね」と答えている。エリクソンも、その著書の中で「親の世話から生まれた信頼は、実に、その宗教の実在の試金石でもある」とのべている。

○その他気づいた点について

①他の職業と比較して、速成（児童期よりの法務の手伝い、僧侶の資格の早期の取得等）を望まれながらも、通常きわめて高齢となるまでは、中心的役割を果す立場とならない。

②僧侶になるということを〝家業〟という認識を拒否しながらも、どこかに同様の認識がある。兄弟のある被面接者は、一様に「僧侶とならない兄弟が、仏教的な思想を持つことは、余り期待しないし、そういった話もしない」と語っている。そこに、誰か一人だけが継ぐことで事足れりとするものを感じた。

③僧侶になるということについては、「初めに信仰ありき」という自由な状況ではなく、「初めに寺ありき」という制限的状況の存在を改めて感じた。特に次男、五男といった僧侶を志す被面接者の答えの中に、そういったものを如実に感じた。22歳のS．T氏（I＋II9型、F→A型）は「親から僧侶になってくれと言われて仕方なくなったという長男である友人の発言には不愉快になる」と述べている。

④とらえ直しの契機について2/3以上のものが、〝加行〟〝修行〟ということをあげていたのは興味深い。

⑤宗教者としてのあり方ということについて20名の大多数の者が、精神的な意味で指導的役割を果すということをあげていた。

しかしながら、その具体的なヴィジョン、方法になると、観念的、理念的、道徳的なことにとどまり、明確な形のものは少なかった。

その中で、具体的なものを提示したのが、仏教思想を従来の形で学ぶことと併せて、かつては付加価値のようにみなされていたもの（美的なもの、国際的なボランティア活動等）を主題として取り組んでいる人達であった。

青年僧侶にあって、自分の志向性にあった仏教の現代的付加価値を模索していくことが現代において、自分自身のアイデンティティを保ちながら、宗教者として成長していくことにつながるのではないだろうか。また青年のそのような摸索が許容ができるか否かは親にとっての課題の一つであろう。

一、おわりに

同一性地位面接については、同一性形成に含まれる補捉的問題の中では、性役割への態度や権威像の認知等々が重視されており、そのような面接内容も加味することが、この面接の妥当性を高めることになる。

また、本研究における四つのステイタス、四つの仮説的類型については、ある一定の間隔でその安定度を確める必要もある。

更に、奥の深い事例研究には、ロールシャッハテスト、ＴＡＴ等の投影法による心理テストをあわせて行う必要性も感じている。

終りに宗教観、宗教的態度の深まりの問題は、本来的には、生涯を通じての課題でもある。本研究においては青年期に限ってその考察を行ったが、今後は生涯（特に壮年期～老年期）にわたっての宗教観、宗教的態度の深まりを縦断的手法を用いつつ、追究してみたいと考えている。

そうすることで、家族の領域についても、今度は親の側からの青年僧侶への働きかけ等を臨床的に把握できるように考える。

（1） モラトリアムとは、経済的な非常事態において債権や債務などの決済や支払いを一定期間延期し猶予することを意味する経済学的用語である。

（2） 古沢頼雄（1967）は「自我同一性尺度」としての自己信頼感②目標の設定③対人関係の保持等の下位概念により自我同一性を定義して、質問紙法による調査を行った。村瀬嘉代子（1967）らは、非行少年、正常な少年等の群れに対してTAT（投影法）を実施し、彼らの自我同一性をとらえるための尺度として他者との相互作用、信頼関係を設け、被検者の各群れの特徴を分析評定した。

（3） 1965 Determination and construct validity of ego identity status（Ohio State University, Dissertation, 1964）

（4） 早期完了（フォークロジャー）は、経済学の用語で、原義は、抵当権・質権の請け戻し権喪失、放棄の意。

（5） 「大学生の自我同一性」東京大修士論文1975年

（6） 母親の愛を得るため、父親に対して競争者として戦闘的に近づこうとするが、歯が立たない体験をくり返す後、異性の親への憧れを放棄し、同性の親へと同一化を強めていく。

（7） 面接においての質問内容は次の通りである。質問番号を○でかこってない質問は、マーシャ及び無藤の面接形式であり、○でかこってあるものは、新たにつけ加えたものである。

○面接内容

導入

1 何歳ですか。

2 出身地はどちらですか。

3 家族構成は。

4 御家族の方々の職業と最終学歴は。

5 漠然とでも、この（その）大学へ行こうと考え出したのはいつ頃からですか。他の大学を考慮しましたか。

6 何を専攻しています（いました）か。留年、転科、休学をしましたか。

7 この（その）専攻にしてみてどうですか。どういう所が魅力です（でした）か。

（職業）

1 将来（現在）の職業については、どのように考えていますか。

2 すぐに専攻を生かすつもりですか（つもりでしたか。）

（漠然としている場合は、どういう領域でどういう種類と尋ねる。特定の職業につくつもりがある時は「職業につくことをどのように考えていますか。」）

3 ～になるということを、どのように考えて決めまし

たか。他のものを考慮しましたか。（どうして考えを変更したのですか。）

4　～の魅力はどういうところですか。

～になったら、仕事の上での日常生活はどんなだと思いますか。

～になるために、何か必要（大切）なことがあると思いますか。

5　～になろうということについて確信の持てなくなったことがありますか。いつですか。

6　何かもっと良いものがあれば、変えるのをためらいませんか。あなたにとって良いと考える基準はどんなことですか。

7　親というものは、子供に何かになって欲しいとか、どういう仕事をして欲しいとか期待していることがよくあります。お宅の場合は、どういう期待をもっていらっしゃるようですか。直接に言われたことはありますか。その時（それに対して）どのように、あなたは感じていますか。

8　～になろうと考えていることについて御両親はどう感じて、いらっしゃるようですか。それに対して、あなたはどのように感じますか。

（価値観）

1　尊敬する人、あなたが何らかの影響を受けた人は誰ですか。（好きな本や著者ということでも結構です。）

2　あなたにとって、生きていく上で、一番大切だと感じられることはどのようなことですか。たとえば生きていく上でこれだけはしていきたいとか、自分にとって、こういうことが一番大切だとか、こういう視点は見失いたくないとか、こういうようなことをめざしていきたいというようなことです。

3　どういうところから、そう感じるようになりましたか。そのきっかけは。

4　そういうことが、自分にとって一番大切だということについて確信が、持てなくなったことがありますか。いつですか。なぜですか。どのようにして、それを克服しましたか。

5　その一番大切なことについて、あなたが考えを変えることがあると思いますか。

6　価値観や人生観のことで、人と話し合ったり、論じ合ったりすることがありますか。その相手は。

7　御両親は、どのような価値観、人生観を持っていらっしゃいますか。それに対して、あなたはどう感じていますか。

8　あなたの価値観、人生観について、御両親はどう感じていらっしゃるようですか。それに対して、あなたはどう感じているすか。

〔宗教〕

①あなたにとって、宗教とは何ですか。〔宗教〕〔仏教〕という言葉から、何をイメージしますか。〕

② 何か宗教集団に関係していますか。そのイメージは。

③ 初めて、その集団に属する自分を意識したのはいつ頃ですか。

④ それ以前の自分とそれ以後の自分の行動・考え方・生活に変化がありましたか。（行事や自己規制の程度等々）

⑤ ③以外で、宗教について、よく考えた時期や人と話し合った時期がありますか。いつ頃、そのきっかけは。その時、宗教集団、宗教についてどう考えましたか。

⑥ それ以前とそれ以後では、どこか、自分の行動や考え方、生活に変化がありましたか？

⑦ 宗教的に、あなたが、何らかの影響をうけた人はいますか。好きな本や著者でも結構です。どのような点ですか。

⑧ 自分の宗教信念（信条）に疑問をもったことがありますか。いつ頃、そのきっかけは。どんなことを考えましたか。その疑問は解決されましたか。解決したとすれば、どう解決しましたか。

⑨ 家族の方々の宗教に対する態度、考え方はどうですか。それに対してあなたはどう思いますか。

⑩ 宗教についてのあなたの考え方に対して、家族の方々はどう感じていらっしゃいますか。

〔家族〕

① 父親（母親）との思い出の中で自分にとって一番良い意味で印象に残っていることは何ですか。それは、いつ頃のことですか。

② 父親（母親）との思い出の中で、一番悪い意味で印象に残っていることは何ですか。それはいつ頃のことですか。

③ 父親（母親）との関係において、自分はどうあるべきだと思いますか。実際には、どのようにふるまってきましたか。そのような自分について、どのように思いますか。良い点、悪い点など具体的にあげてください。

④ 父親（母親）をかけがえなく思うのは、どんな時、どんなこと（役割、あり方）でしょうか。

⑤ 父親（母親）を一人の人間（男性・女性）として、初めて意識したのは、いつ頃ですか。どう感じましたか。（考えたことのない場合は、どう感じますか）

⑥ あなたにとっての理想の父親（母親）像とは。（家庭での役割、性格的等）

⑦ あなたの父親（母親）は理想とどの位一致していま

すか。〔①非常に一致している②だいたい一致している③どちらかというと一致している④どちらともいえない⑤どちらかというと違う⑥かなり違う⑦全く違う〕①～⑦の内より選んで下さい。

⑧　親としての自分の姿を想像したことがありますか。

いつ頃ですか。どんなことを考えましたか。すでに結婚し、あるいは、その後子供がいる場合は（自分は親として、どういう親になろう、なると思いますか）

以上が面接の標準形式である。

（8）危機は傾倒を評定する際のチェックポイント

○危機と傾倒を評定する際のチェックポイントとして考えられること。

（職業）危機

・何の職業につきたいか決定しようとしたことがあるか

・他のものを考慮したか。あるいは、その職業についての自分なりの意味を模索してきたか。

・～になろうということについて、確信が持てなくなったことはあるか。それをどのように克服してきたか。

・両親の期待から逸脱したり自分なりにとらえなおしたりしてきているか。

（職業）傾倒

・何の職業につきたいか明言できるか。

・～の魅力、仕事の上での日常生活、～になるのに必要なものが解っているか。

・変えることがありうるか。

（価値観）危機

・いくつかの価値のうちで、どれが自分にとって大切かということ、あるいは、自分にとって一番大切な価値は何かということを模索したことがあるか。

・現在のように考えるようになった契機はあるか。

・何が一番大切かについて、確信がもてなくなったことがあるか。それをどのように克服してきたか。

・人や本から影響を受けたことがあるか。

・両親の価値観や本人への期待から逸脱したり、自分なりにとらえ直したりしてきているか。

（価値観）傾倒

・生きていく上で、自分にとって一番大切な価値観は何かを述べることができるか。（いろいろな価値の順位づけができるか）

・変えたりする場合があるのか。あるとすればどんな場合か。

・友人や両親と、価値観や人生観のことで論ずることがあるか。

（宗教）危機

・宗教的なことに出会って、自分の行動・考え方、生活に変化がおこったことがあるか。

・宗教的に人や本から、影響を受けたことがあるか。
・宗教的信条について確信がなくなり、疑問を生じたことがあるか。それをどのように克服してきたか。
（宗教）傾倒
・自分にとっての宗教の意味、あるいは、宗教のイメージを自分なりにとらえているか。
・宗教あるいは宗教集団と自分との関係を明確に位置づけられるか。
・僧侶とて生きていく際に、何が自分にとって大切であるかということも述べることができるか。（職業の領域の質問を参考に）

以上の点を検討しながら、三つの領域の各々について、危機と傾倒の程度を評定する。

（家族）家族・両親に対する姿勢のチェックポイント
（幼い頃はどうか）
・両親との思い出の中で、良い印象をもつものがあるか。
（最近もしくは、青年期になってはどうか）
・親を一人の人間として、客観的にとらえたことがあるか。その際に、肯定的姿勢をもってとらえたか。
（親に対する評価）
・1〜7のうちいずれか
（今後の家庭に対する自分の姿勢）
・親としての自分をどう考えているか。

以上の点を中心に検討して、被面接者の家族・両親に対する姿勢を判断する。

（9）四つの類型については、それを評定する際に、自らの環境を拒否的・批判的に受けとめた体験があるかないかがポイントとなる。

この〝拒否〟は必ずしも、青年期においての、意志決定期間（危機）を意味するわけではない。たとえば、児童期においても、そういった形で受けとめた時期があれば、〝拒否批判〟を経験したとする。

無論、こういう経験をした時期が、青年期であれば、マーシャの指摘する所の「危機を経験した」ということができる場合もある。

「場合もある」とは、否定の内容としては次の二つのことが考えられるからである。

一つは、寺院の住職となること、僧侶となることすべてに対する否定、もう一つは、現在の形式を維持することを前提として、僧侶もしくは、住職になることを否定する場合である。

前者のような意味での否定を経験した場合は、マーシャの言う所の危機を経験したことになるが、後者のような意味での否定については、必ずしもそうではないと思う。

その辺を充分に考慮しつつ、被面接者がこの四つの型のいずれにあてはまるかを判断していかねばならない。

（10）①無藤清子１９７９「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性。教育心理学研究27集②北村英哉１９８３「現代日本における自我同一性形成の特質」。東大教育学部心理教育相談紀要６集